



二代藩主・井伊直孝公の甲冑をもとに同組合が制作した「井伊の赤備え」の甲冑。当記事本文内で紹介した試作品とは異なり、一部の部品を簡略化し、現在の販売価格を実現した。試作品は彦根商工会議所2F会議室で、改良品は彦根市役所仮庁舎3Fなどで見ることが出来る

巻頭特集 彦根仏壇事業協同組合 謹製

# 伝匠 彦根甲冑

武勇の誉れの象徴である朱。格の高さを主張する金色(こんじき)の装飾の数々。かの有名な「井伊の赤備え」を再現したこの甲冑には、細部に彦根仏壇の伝統技術が生きている。

## 彦根仏壇の伝統技術で「井伊の赤備え」を再現

「なぜ甲冑に仏壇の技術が？」と不思議に思う人もいよう。両者はともに長い歴史こそあれど、一見して別物だ。

江戸初期に登場した「井伊の赤備え」の甲冑は、その後二百年にわたる泰平の世の中で需要を減らし、色褪せていった。当然、職人たちは仕事を失うことになる。その技術を仏壇製造に活用したのが、彦根仏壇のはじまりだといわれている。

工会議所はひこねブランド開発委員会を平成26年に立ち上げるべく、彦根仏壇事業協同組合に声を掛けた。

彦根城博物館に所蔵されている井伊家代々の甲冑を、現代まで受け継がれる仏壇の伝統技術をもって再現し、彦根の新たな特産品開発と、ものづくり産業の活性化につなげようという試みだった。

「まったくのゼロからのスタートでした」と、同組合の専務理事・寺村勇さんは当時を振り返る。まずは彦根城博物館で甲冑熟覧会を開き、史料を紐解くところから始めた。しかし、県指定有形文化財であるがゆえ、実

際には紐解くどころか手で触れることすらできない。学芸員に協力してもらいながら採寸し、図面を引いた。

制作は、銅板製造を滋賀県板金工業組合が、その他すべてを彦根仏壇事業協同組合が担当。彦根仏壇の各工程に携わる職人「工部七職」のうち四職が、各々の技術と誇りを込め、腕を振るった。兜の天衝を宮殿師が造形し、箔押し師が金箔を施す。塗師が銅板に漆を塗り、鍔金具師が留め金などの細かな装飾を再現する。完成した部品の組み立てには、同組合の家族で構成する「蓮美の会」の会員たちが取り組んだ。



鍔金具師



箔押し師



塗師

塗師：仏壇では木に漆を塗るところを銅板に。一領につき200枚以上の部品があるため、数をこなすのに一苦労だ。箔押し師：宮殿師が絶妙なバランスに仕上げた天衝に、箔押し師が丁寧に金箔を押ししていく。鮮やかな金色の天衝は朱色の胴体と並んで本作の主役といえよう。鍔金具師：武器を接合する紐を通すための留め金などを鍔金具師が制作。残念ながら改良版ではコストとの兼ね合いで省略された。



組合が地域の小学生向けに実施した職人体験会の様子。参加者の中から彦根仏壇の伝統を支える人材が誕生する未来を寺村さんは願ってやまない

彦根仏壇事業協同組合  
彦根市中央町3-8 ☎ 0749-24-4022

伝匠 彦根甲冑 受付中!  
完全受注生産。1領1,500,000円～(オプションを除く)。制作期間4か月～。法人・団体向けにレンタルもあり。すべて着用可能。詳細は電話またはメール(info@hikone-but sudan.net)にて問い合わせを。  
http://kacchu.hikone-but sudan.net



大津祭の曳山「源氏山」を4分の1サイズに忠実に再現。彦根仏壇職人の技術を結集し、3年かけて完成させた。彦根商工会議所1Fエントランスに展示中

後世に残していくために、私たちはこの活動を続けていきます

完成した部品を組み立てる「蓮美の会」の皆さん。彦根仏壇界隈は昔から結束力が強く、何かあったときに助け合う風土がある。彦根仏壇の伝統を後世につないでいくための大きな支えになっているのだろう



彦根仏壇事業協同組合 専務理事 寺村仏壇店 店主 寺村 勇さん

約一年後、渾身の甲冑が完成する。誰もが息をのむほどの美しさ。四百年前を生きた二代藩主・井伊直孝公が、魂の依り代を得て現代に蘇ったかのような迫力に満ちていた。

た姿で店頭に並んでいる仏壇を見てもらえる程度です。しかし甲冑であれば、普段仏壇と関わりの薄い人びとも見てもらえる。私たちの仕事を、彦根仏壇の製造技術の高さを、広くPRできるチャンスだと考えています」と寺村さん。

この実績が評価され、彦根仏壇事業協同組合は以降、地域を代表して彦根甲冑の制作と販売を手掛けるようになる。しかし当然ながら、現代において実用性のない甲冑はそう簡単に売れるものではない。本業である仏壇とは購買層も異なる。それでも同組合が甲冑づくりを担う背景には、「彦根仏壇の技術力を入びどに知ってもらいたい」という思いがある。

「私たちの仕事が入びどの目に触れる機会は多くありません。完成し